

猫なんか、大嫌いだ！

うちの近所の「トラ猫」ども

うちの近所のトラ猫どもときたら、まったくもって腹に据えかねる奴等である。どうやら、家の庭は、奴等の格好の抜け道らしい。少しくらい遠慮して通るのならば、畜生の性と、笑って通そうものを、我が物顔に、のそりのそりと、威張り散らして通り抜けていく。これでは、どっちが家主かわかりやしない。

それだけならば、まだしも、あちこちに、小便はかけるわ、車の上で日向ぼっこをするわ、おかげで愛車は、猫の足形だらけ。うっかり、縁の戸を開けておこうものならば、ちゃっかり上がり込んで昼寝をしている。

そんな姿を、家主に見られても、悪びれる様子もなく、人の顔をまじまじと見て、一声、にやあ、と鳴く。追い散らしても、追い散らしても、しばらくすれば元の木阿弥。一匹が来なくなると、これ幸いと他の奴がやってくる。縄張り拡張に一役買ったと思えば、余計に腹が立つ。

一度、とっつかまえて、折檻してやろうかとも思うのだが、悔しいかな、敵のほうがすばしい。ハデにやって、そこかしこにいる、いわゆる「動物愛護家」の槍玉に上がるのもつまらぬ話である。そんなわけで、見つけたら追い払う以外に打つ手がない。まったく腹立たしい限りである。

中には首輪をつけたり、鈴をつけたりした奴がいることを見ると、どこか近所の飼い猫であるのかもしれない。一方、海千山千の野良も何匹かいるが、総じて飼い猫風のほうが、あつかましい。平気で人の家に取り込むのも、この手合いである。その点、野良公は自分の分というものを、よく心得ているようだ。歩くときも、物陰を、遠慮しながらコンコンと歩いている。逃げ足も速い。逃げ出したら一目散、あつという間に物陰へ隠れてしまう。飼い猫風とはいえ、逃げるフリはするものの、必ず、こつちを見える所について、様子をうかがっている。そして、こつちが追わないとみると、凶々しく戻ってくるのである。時折、縄張り争いであろうか、夜中に、大声を上げて喧嘩

をする。野良公対飼い猫風ならば、勝負は見えている。次の日、「飼い猫風」が、盛大に引っかけキズを作っていたのを見て、思わず相手の野良公に拍手を送ってしまった。

ともあれ、何故に、こんなに猫が多いのか。純然たる飼い猫らしいものもいるが、飼い猫風の何割かは捨て猫なのだろう。甘やかされて飼われていた飼い猫に、宿無し暮らしは辛かろう。しかし、だからといって、人様の領分を侵していいというほど、世間は甘くない。突然にして雨風をしのぐ住処を失ったことには同情するが、お前が恨むべき相手は、お前を捨てた飼い主である。そして私は今日も、哀れな猫を追い立てるのである。

---

畜生はどっちだ？

もう、20年ほど前の話である。私はその頃、京都の七本松下立売のポロアパートに住み着いていたのだが、いまだに忘れられない出来事がある。

ある夜更けのこと。タバコが切れたので、買いに出た私は、七本松通りを歩いていて、かすかな物音に気がついた。夜更けで、あたりが静まり返っていなかったら気がつかなかっただろう。「みゅー、みゅー」という猫の、それも、子猫の鳴き声だった。

薄明かりの中を目を凝らしてみると、バス停横の歩道に、段ボールの箱が置いてある。鳴き声はそのあたりから聞こえてくるのである。私が近寄ってみると、その箱の中には生まれたばかりの、まだ目も開かない子猫が数匹入れられていた。何匹かは、外にはい出して、路上をさまよっている。深夜の車通りのない時間帯が幸いしたようで、幸いにも、無事であった。しかし、箱のなかには、既に動かない子猫もいる。生まれて間もなく、親の顔を見ることもなく捨てられたのだろうか。むい事をする奴もいるものである。

正直言って、私は扱いに困ってしまった。しかし、そこに放っておくわけにはいかない。私は下宿に戻ると、後輩をタタキ起し、一緒に猫を下宿、といっても木造の安アパート、の庭先に運んだ。

さて、運んだものの、また二人して、ハタと困ってしまった。このまま放っておいたら、明日には、全部死んでしまうだろう。さすがに、そんな姿は見るに耐えない。そこで、生き残った二匹を後輩の部屋に持ち込み、育ててみることにした。ミルクを人肌にあたため、脱脂綿に含ませて口元に持っていくと、子猫は無心にそれを吸った。後輩と交代で猫の世話をする日々が始まった。その甲斐あってか、子猫はどんどん元気になり、みるみる太っていった。

しかし、そんな日々も長くは続かなかった。夜昼なく、腹が空くと鳴く声も、日増しに大きくなり、とうとう、アパートの古参の住人の耳に入ってしまったのである。実は、以前、このアパートでは、ちょっとした猫騒動があった。近所に住み着いたドラ猫が、あちこちの部屋に忍びこんでは悪さを繰り返したのである。その被害が最も大きかったのが、アパートに、もう長年住んでいる一人のお婆さんの部屋だったわけだ。悪行を重ねた猫はお縄となり、あえなく保健所送りとなったのだが、お婆さんの怒りは収まるはずもない。そんな状態だったから、猫を飼っているというだけで、大騒ぎになってしまった。

なんとか、事情を説明しようと思いたものの、大家まで引っぱりだしての剣幕に、どうすることもできず、あわれな子猫は、とうとう保健所へ送られてしまったのである。血も涙もない話ではあるが、その老婆を責めることのできないだろう。実際、猫どもに悪さをされた怒りはよくわかる。責められるべきは、その猫を捨てた輩である。生まれてしまった以上、その命は貴重なものである。捨てる一瞬の呵責に耐えれば、そいつは楽になるかもしれないが、浮かばれぬのは、この世に生を受けながら、猫としての尊厳すら保てなかった子猫たちである。悪行の限りを尽くした野良公ならいざしらず、何の罪もない子猫の事を思つと、20年を経た今でも心が痛むのである。

---

### 孤高の老猫？

話は今に戻るが、ちょっと変わった猫が近所にいる。姿は、いわゆる純正の「茶トラ」猫なのだが、かなりの歳とみえて、いつも決まった場所ではなたほ

つこを決め込んでいる。人が近づいても逃げようとしめない。いや、気にすらしていないと言ったほうがいいかもしれない。人にたとえれば、功成り、名を遂げて、余生を気ままに送る孤高の老人といったところだろう。さすがの野良公たちも一目置いていいのか、同じ場所を動くことなく、縄張りとしているのである。夏は、あばら家の脇の竹藪の蔭でずみ、冬は、人通りの少ないアスファルトの歩道で昼寝をする。悠々自適の老猫は、近所でもなかなかの人気者らしく、とても餌など探す体力はなさそうにもかかわらず、餌には不自由をしていない。孤高の老猫が人から施しを受けるのか……という突っ込みはさておき、私もこの猫には少なからず好感を持っている。私が猫嫌いなのは、あのわがままな性格の故である。他人のわがままを許せない人間は、そいつ自身がわがままな奴なのだと言ったが、まさに、そのとおりで、私のわがままな性格からして、気まぐれきわまりない猫は、許しがたい存在なのである。にもかかわらず、その猫は、まさに「猫」であるにもかかわらず、そんな嫌味を感じさせない。猫にも「年輪」というべきものはあるのだろうか。

毎朝、駅に向かう道の途中に、その猫はいる。「今日も元気でいるな。」と、その横を通って会社に行く。帰ってくると、藪の蔭に姿が見える。その猫の姿が見えると、なぜかホツとする。姿が見えない時、暑さ寒さの厳しい時などは、その猫のことが心配になる。時として、その姿は、郷里に残してきた老いた親と重なる。もしかすると、彼の猫に感じる気持ちは、親不孝な自分に対する罪悪感であるのかもしれない。その猫に餌を施すでもなく、ねぐらを与えるでもなく、しかし、その健在を祈る気持ちは、裏を返せば、親に対する自分勝手を端的に表しているのかもしれない。

ともあれ、そんな私の気持ちなど関係無しに、猫は今日も、その場所にいるのである。不惑を間近に、いまだ迷いのほうが多い私をあざ笑うかのように、彼(彼女?)は、いつもその場所にいるのである。そう思うと、やっぱり少し腹も立つ。そうして、そこで達観しているがいい。俺は自分の間、せいぜい生臭く生きてやる。迷って、悩んで、苦しんで。だから、お前は、そんな俺を、そうやって横目で見ている。ずっと……そう。猫なんてそんな奴さ……

だから、俺は猫が嫌いなんだっ！